

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟選

鯛焼やサッカーの子も塾の子も
 紀の川市 中島 走吟
 〓評〓たい焼き屋の店先。サッカー帰りが塾帰りか一目で見分けがつくが、どちらも腹をすかせて今をひたむきに生きている。
 御降や皇居の松の青々と
 東京 関口 昭男

西村 和子選

禅林は門を閉ざして掛大根
 大阪 池田 壽夫
 〓評〓門を閉めきった禅寺の内が想像される。大根を干して漬けて、冬の間の食糧とする質素な暮らしと、厳しい修行。
 白鳥のこゑうねり立つ夜明けかな
 加須市 萩原 康吉

井上 康明選

双眼の風りうろうと尾根越せり
 名張市 中森祐紀子
 〓評〓やっこだこを思い浮かべた。眉の下の大きな目が下界を見下ろし、糸が風に鳴って、たこは尾根の空へ一気にながっていく。
 初競りの子牛ゆつくり歩みけり
 にかほ市 金 民子

片山由美子選

教室のストープ点けて生徒待つ
 茨城 石川 昌利
 〓評〓生徒たちの登校前に教室を温かくして待ってこれている先生。エアコンなど設置されていないかった時代のストープを思わせる。
 遮断機の下りて寒さのつりけり
 諫早市 麻生 勝行

〓評〓雨に洗われた松がすがすがしい。御降の季語と皇居のたたずまいがしっくり調和する。
 節穴に差し込む光大旦
 鎌倉市 小川 求

〓評〓白鳥がいつせいに鳴く迫力を夜明けの空を背景に描いた。聴覚にも視覚にも訴える句。
 舗道とてつつけば餌あり冬雀
 東京 望月 清彦

〓評〓その年初めての競売会である。引き出された子牛は、動することなくゆつくりと歩いている。
 初句会自力の歩中新たにす
 福岡市 小出 達夫

〓評〓踏切で遮断機に制せられた途端に寒さが増したのは、それまで急いで歩いてきたからか。
 風花やしばらくは来ぬ路線バス
 武蔵野市 渡辺 一甫

雪たるま子ども部屋より灯の漏れて
 富士宮市 渡邊 春生
 お互ひに老けたと思ふ日向ぼけ
 伊勢市 藤井 信弘

風に乗り風の後れて雪蛭
 横浜市 菅沼 葉二
 冬うつら庭をへぐる三輪車
 飯塚市 倉田 幸男

冬麗やロザリオを掌に石畳
 長崎市 音 超子
 物知りの氏子総代鳥総松
 山梨市 浅川 青磁

微風にも押し戻されて冬の蝶
 羽曳野市 鎌田 如水
 寒鯉の潜水艦のごとき影
 湖西市 宮司 孝男

まさなる空の静かな年の暮
 青梅市 松野 英昌
 溶鉱炉も親父もあらず春の雲
 中岡市 石田 常夫

冬の月逢はねば人の遠ざかり
 小山市 岸 一泉
 蔵人は杜氏を信じ寒造
 岸和田市 妙中 正

水鳥の羽を転がる滴かな
 湖西市 宮司 孝男
 雪中のラグビー授業湯気上げて
 東京 石川 昇

元日の静かに暮るる漁師町
 春日市 林田 久子
 日溜りに一服しては大根干す
 春日市 林田 久子

草原と小さきゲルと冬銀河
 真岡市 小川 充
 赤提灯故郷の酒を爛て飲む
 平塚市 原 道雄

勝独楽や男の子は今も収集家
 島根 高橋多津子
 東京の空の清浄松の内
 武蔵野市 渡辺 一甫

親子鳩ねむる冬ラパートの縁に
 相模原市 富里 泰男
 虚子とのみ墓石に刻し寒椿
 町田市 枝澤 聖文

極月の渋滞またぐ歩道橋
 奈良市 伊東 勝
 終点はネオンなき町冬銀河
 和歌山市 曾根 澄子

神の留守ココアの匂ふ巫女溜り
 笠間市 伊藤 邦夫

賑やかな声の聞こえる初電話
 神戸市 岸下 庄二

親子鳩ねむる冬ラパートの縁に
 相模原市 富里 泰男

極月の渋滞またぐ歩道橋
 奈良市 伊東 勝

普通の暮らし

高田正子

年が明けるころになると、わが家の金柑に野鳥が集まってくる。柿などの柔らかな果実がすっかり姿を消し、果皮は少々こわつくが黄金色に熟した金柑が目を引きよくなるのもよし。

金柑は秋の季語だが、色も味も乗ってくるのはもう少しあとだ。わが家でも正月の用意をするころに初めて摘み、残り野鳥の好きにしてもううことにしている。

ヒヨドリは止まるというよりは、木にすがって揺すりながら食いあさる。ときどきハトも来ている。これらは食い散らかして出すものを出し、そこを汚し放題にしてどっとたつ、ちょっと嫌なやつらだ。ある朝、かわいい来訪者があった。かじりさしの散らかった実を、なんとメジロがせせていた。メジロのくちばしに金柑の皮は固かる。だが、誰かがむいてくれたいたら、食べられる実となるのだ。

・目白追ふ鴨憎々し百千鳥
 阿波野青畝

ヒヨドリはすずすずしいだけかと思っていたが、なかなか良いやつではないか。もっとも当人(鳥)の関知しないところかもしれないが。

・梅白く遊ぶは目白鸞に非ず
 山口青邨

季語の出会い

(たかた・まてこ)俳人